

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告--場所とイベントの関係性を中心に

著者名(日)	林 史樹
雑誌名	神田外語大学紀要
巻	19
ページ	367-379
発行年	2007-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001230/

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告 －場所とイベントの関係性を中心に－

林 史樹

1. はじめに

2005年10月14日から16日まで、大韓民国(以下、韓国)釜山市にある通称「上海通り」で「第2回上海通り祝祭」というイベントが開催された。イベントが行われた場所は、もともと清国の租界地があり、「中国」と縁が深いと考えられる場所、釜山市東区草梁洞周辺である。上海通りとは、1993年に釜山市と上海市が姉妹都市となったことを記念して命名された通りである。1999年には大通り沿いととの交差点に、通りのシンボルとなる「上海門」が建てられた。

このイベントは、釜山市東区という行政自治体が主導権をとって行っており、韓中の交流を促進させると同時に、内外の観光客を積極的に呼び込む目的がある。しかし、看板として韓中友好を謳っているにもかかわらず、地元チャイナタウンとあまり関係のない人々によって演出されてきた。

この一角の主人公といえば、韓国に住み着いた華僑となる。現在、華僑は韓国全体に約2万人が居住しており、そのうち釜山には約1900人が住んでいる。彼らは韓国において長く弾圧の対象となり、今日でも韓国内の民族差別が残っているため、海外へ移民する人々が後を絶たない。彼らの90%以上は中国の山東省出身といわれるが、ほとんどが中華民国籍(台湾籍)をもっている。彼らは、とくに以前の租界地で清館があった草梁洞に多く集住している。草梁には今日でも小中の華僑学校があり、多くの中華料理店がひしめき合っている。これら韓国華僑の存在が、上海通りにおいて「中国」的なものを演

出するのに一役買っている。

しかし、実際に上海通りをみたとき、ロシア系や在ロシア同胞による商店や遊興飲食店が目立つ。看板も漢字に混じってロシア語が多くを占めている。そのほか、近年ではフィリピン系などの住民も目立ってきており、上海通りというものの、新たに設置された街灯やアーチ、モニュメントなどをのぞけば「外国人通り」を思わせる雰囲気である。また、上海通り設立過程は、現中華人民共和国政府とも密接に関わっているが、上海通りの主たる住民は韓国華僑、すなわち中華民国籍をもった人々である。

そこで、地域住民である華僑のなかには上海通り祝祭を懐疑的にみる者も少なくなく、実際に全面的な参加をしていない。たとえば、日本のマイノリティ・コミュニティで、その住民によって積極的に行われる「横浜中華街春節祭」や「神戸南京町春節祭」、「四天王寺ワッツ」などとまったく異なる。あくまでも行政側である釜山市東区の主導で行われたのであり、そのなかでも文化体育課文化観光担当が中心となっている。イベントの企画段階で華僑からの積極的な参加や韓国華僑に対する積極的な取り込みはなかったと聞く。

通常、イベントはそれが開かれる場所との関係で語られることが多い。しかし、以上のことを念頭においたとき、上海通り祝祭というイベントが果たしてどれほど場所との関係性をもっているのか疑問になってくる。本稿では、神田外語大学研究助成金を受けて行った第2回上海通り祝祭調査において収集したデータを、上海通りの変遷や第1回上海通り祝祭で得たデータとつきあわせて報告すると同時に、場所とイベントの関係性についてデータから考えられることを提示したい。

2. 「上海通り」および韓中関係の変遷

文献上で朝鮮半島に中国系の人々が移り住んだのを示すとき、1882年に清国と朝鮮の間に結ばれた「朝中商民水陸貿易章程」が引き合いにだされる。

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告
- 場所とイベントの関係性を中心に -

釜山の場合、仁川と同時期の1983年11月、草梁に清国理事府をおくための測量が開始され、1984年5月に清国理事庁（後の領事館、いわゆる清館）が設置された。草梁とは、現在の釜山駅前からみて、中央路を越えた先にあたる一角である。草梁はもともと田圃で、共同墓地もあったが、清国理事庁ができたことで、1890年頃から様変わりした。今日の釜山華僑協会と華僑学校がある場所が清国理事庁のあった場所で、中国の租界地は日本の租界地と対峙するかたちで設けられた。

草梁に居住した清国人の多くは、上海などから絹織物や洋服生地、鏡、糸、タオル、化粧品のような日用雑貨を仕入れて販売する商人であり、草梁から離れて住む人々に中華料理店を開く者が多かったという〔崔海君 2000: 183〕。ただし、彼らが草梁から離れてといっても富平洞・東光洞・昌善洞・影島など多くは東区と隣接する中区周辺にかぎられていた。

その後に定着しかけた中国系の人々も、1931年に起きた万宝山事件と中国人排斥運動、1937年に起きた日中戦争で、再び釜山を去った。ここに人々が戻ってくるのが日本の敗戦後であったが、それも長く続かず、朝鮮戦争が勃発し、中国共産党軍が北朝鮮を助けて参戦するや居場所を失った。

この場所に新しく入り込んできたのが酒場経営者であり、アメリカ陸軍兵士相手のネオン街となった。もともと一駅隣の中央洞にあったネオン街が、1953年当時に中央洞にあった釜山駅前が大火災に遭ったのを契機に草梁に移ってきたのである。「清館通り」と命名されたこの場所も、アメリカの大衆音楽が流れるなか、450名もの若い韓国女性のホステスを有する「テキサス通り」になった〔崔海君 2000: 187〕。

1969年6月に釜山駅が草梁に移されると、駅前にホステスのいるネオン街があることに反対する声があがった。また、同年7月に、アメリカのニクソン大統領が発表した「グアム・ドクトリン」を受けてアメリカ陸軍が撤収し始めた。そのため、テキサス通りの景気が落ち、酒場から衣料品や靴を扱う

店舗に変えるところも現れた [崔海君 2000: 187-188]。

そのうち、アメリカ陸軍兵士に代わって釜山港を訪れる外国人船員やアメリカ海軍兵士たちがこの通りに訪れるようになった。1980年代以降になると、外国人相手の土産物屋が結構できていたらしい。

1980年代後半に東西冷戦が終結し、1990年に韓国国交正常化すると、ウラジオストックからのロシア船が釜山を訪れるようになった。ロシア人船員や観光客、そして商人が多く釜山を訪れるようになると、飲食店や、衣装・革製品を扱う商店がロシア人を相手に商売をし始めた。夜のにぎやかさは酒場集まるロシア人によって作りだされ、日中でも革製品やそのほかの土産物を物色するロシア人は目立っている。

近年では、そこにフィリピン系の人々が多く入り込んでいるといわれる。また、中国朝鮮族が店舗を構え始めたのも、ごく最近である。

◇ 釜山華僑街を取り巻く略年表

- 1882年、清国と朝鮮の間に「朝中商民水陸貿易章程」が締結される。
- 1883年、釜山の草梁で清国理事庁をおくための測量が開始される。
- 1884年、仁川に清館が建てられ、その清館を中心に仁川租界地ができる。
- 1884年、釜山に清国理事庁が設置される。
- 1894年、日清戦争勃発する。
- 1931年、万宝山事件が勃発する。
- 1937年、日中戦争が勃発する。
- 1945年、日本が敗戦し、中国人が戦勝国民となる。
- 1950年、朝鮮戦争が勃発し、中国共産党軍が参戦する。
- 1953年、中央洞の旧釜山駅前が大火災に遭う。
- 1969年、釜山駅が草梁に移される。
- 1990年、韓国国交正常化する。

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告
- 場所とイベントの関係性を中心に -

1992年、韓中国交正常化が樹立し、韓台国交が断絶される。

1993年、上海市と姉妹都市協定を締結する。

1999年、上海門を建立、上海通りを整備する。

2004年、第1回「上海通り祝祭」を開催する。

2005年、第2回「上海通り祝祭」を開催する。

3. 「上海通り祝祭」の進行

次に、イベントの進行について概観したい。第2回上海通り祝祭は、釜山駅前会場の「メイン舞台」と、駅前大通りを挟んで一筋奥に入った上海通りに設けられた会場「上海通り舞台」、「中央会館前舞台」に分かれて行われた。これは、第1回上海通り祝祭が、メイン舞台と上海通り舞台の2会場しか使用しなかったのに比べ、より一般の区民が参加しやすいようにしたものといえる。

以下、第2回上海通り祝祭のスケジュールを記載し、その比較材料として第1回上海通り祝祭のスケジュールを並べて紹介する。スケジュールについては、各回のパンフレットの記載スケジュールを中心に追加補足を行った。

3-1. 第2回「上海通り祝祭」(2005)の進行

(時刻だけが書かれているものは上海通り舞台での公演、時刻の囲みは釜山駅前メイン舞台での公演、時刻の波線は中央会館前舞台での公演を示している)

◇ 初日 (10月14日) ◇

16:30 テープカット、韓中パレード (上海門 - 中央会館 - 釜山駅前会場)

17:30 太鼓公演

18:00 開幕式

神田外語大学紀要 第19号

- 19:00 上海通り文化ハンマダン（打楽器パフォーマンス）、獅子舞・龍舞、
灯籠をもった創作ダンス、中国伝統舞踊（京劇）、平壤民俗芸術団
- 20:00 タレント祝賀公演（キム・ヘヨン, ソ・チュギョン, ハ・ドンジン）
- 21:30 韓中和合花火（駅前ホテル隣のビル屋上）

◇ 2日目（10月15日） ◇

- 11:00-12:00 中華料理展示および試食会
- 13:00-14:00 上海ツイスト・ダンス
- 14:30-15:30 手打ち麺実演および体験
- 15:30-16:30 中国関連クイズ
- 16:30-18:30 チャヂャン麺（韓国風ジャージャー麺）早食い大会
- 19:30-21:30 東区文化ノリハンマダン（区民芸能競演大会）
- 14:00-18:00 子供写生大会
- 13:00-15:00 世界文化公演
- 15:00-16:30 平壤民俗芸術団
- 17:00-19:30 青少年ダンス大会
- 20:00-21:30 ギター公演

◇ 3日目（10月16日） ◇

- 11:00-12:00 中華料理展示および試食会
- 13:00-14:00 上海ツイスト・ダンス
- 14:30-15:30 手打ち麺実演および体験
- 15:30-16:30 中国関連クイズ
- 16:30-18:00 チャヂャン麺早食い大会
- 13:00-15:00 世界文化公演
- 15:00-16:30 平壤民俗芸術団

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告
- 場所とイベントの関係性を中心に -

18:00-21:30 釜山放送「ショー・TV流浪劇団」

21:30-22:30 閉幕式

※中央会館前舞台の公演では、出演者やスケジュールに若干の変更がでたようである。上海通り舞台でも5-10分ほどのずれはみられた。

◇ 常時行事 ◇

中国伝統衣装展示および写真撮影、幸運のコンガルパン（中身が空洞になっているパン）、中国伝統茶試飲、韓中の行灯展示、伝統行灯体験、思いでのハガキづくり、韓中伝統遊技広場（ハンマダン）、フェイス・ペインティング

3-2. 第1回「上海通り祝祭」(2004)の進行

（時刻だけが書かれているものは上海通り舞台での公演、時刻の囲みは釜山駅前メイン舞台での公演を示している）

◇ 初日（10月8日）◇

16:00 パレード（上海門－釜山駅前会場）

17:00 太鼓公演

17:30 開幕式、龍舞・獅子舞、中国雑伎・武術、タレント祝賀公演（周炫美）、花火大会

◇ 2日目（10月9日）◇

11:00 中華料理展示および試食会

14:00 青少年ダンス大会

16:30 中国歴史クイズ、チャヂャン麺早食い大会、上海ツイスト・ダンス、万里長城づくり、手打ち麺実演および体験

18:00 東区文化ノリハンマダン

14:00 釜山主婦合唱団「ソリパダ」公演、第九回子供写生大会

◇ 3日目 (10月10日) ◇

14:30 中国歴史クイズ、チャチャン麵早食い大会、上海ツイスト・ダンス、
万里長城づくり、手打ち麵実演および体験

第13回ハンゲル詩大会 < 華僑小学校内 >

18:00 釜山放送「ショー流浪劇団」、閉幕式

※ただし、万里長城づくりに関しては、2日目・3日目ともに中止となった。
そのほかの行事も必ずしも時間通りに進行されるわけではなく、10-20分ほど遅れて始まることもあった。

◇ 常時行事 ◇

中国伝統衣装展示および写真撮影、幸運のコンガルパン、中国伝統茶試飲、
中国の伝統行灯展示、中国ギャラリー、「東協」絵画展、人力車体験行事

4. 場所とイベントにみる「ずれ」

上海通り祝祭と釜山華僑街という場所の結びつきを積極的にみようとするれば、もともと清館があり、中国と関連の深い場所であることが挙げられる。そこで、姉妹都市となったことを契機に、韓中交流の活発化をねらってこの通りを「上海通り」と呼びかえたのである。また一般の釜山住民レベルでも、単に中国＝華僑と結びついているといったようなことがあげられる。しかし、上海通り祝祭は実際にどれほど場所に結びついたイベントであったのだろうか。

まず、通りを彩る国旗は五星紅旗（中華人民共和国の国旗）と太極旗（大韓民国の国旗）にかざられた。青天白日旗（中華民国の国旗）がみられるのは、通り沿いの華僑中等高等学校と華僑小学校、釜山華僑協会事務所の建物の

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告
- 場所とイベントの関係性を中心に -

なかだけである。しかし、上海通りの住民である華僑は中華民国籍が大半で、国旗を掲げる際には青天白日旗となる。それが外されている以上、イベントを彩る国旗に、その場所の住人との関係はみられない。

イベントの演目をみても場所との関係はあまりみられない。イベントに先だって行われるパレードの吹奏楽は、釜山情報女子高校吹奏楽部が朝鮮伝統の衣装を着て行った。第1回でも釜山・藝院情報女子高校吹奏楽部が音楽隊の衣装で行った。パレードでは、龍を担いだ男性とチャイナドレス風の衣装で提灯をもった女性のみが韓国華僑で、釜山華僑中高等学校の学生であった。

メイン舞台に移ってからも、イベントに招待された国賓は中国総領事であり、あくまでも上海との姉妹都市提携を前提に中国との友好が強調された。ただし、第1回と異なり、第2回は地元華僑である釜山華僑中高等学校校長が、イベント関係者として1名だけ紹介された。

舞台では、その場所の住人との関係がみられたのは、釜山華僑の学生によって行われた龍舞や獅子舞、提灯を用いた創作ダンスという演目にすぎない。式前公演の太鼓のパフォーマンスや創作舞踊を演じた韓国人や、京劇などを演じた中国人のほか、韓国で朝鮮舞踊の公演活動をする平壤民俗芸術団に所属する脱北者（北朝鮮からの亡命者）であった。その後のタレント祝賀公演で招待されたタレントは、トロットのリズムを得意とする韓国人の懐メロ歌手であった。

第1回にいたっては、雑伎は中国人、武術は韓国人有志、中国舞踊は韓国芸術総合学校の学生といったように華僑以外がほとんどであった。龍舞や獅子舞は韓国華僑が行ったが、第1回は地元釜山に住む華僑でなく、仁川から招待した華僑学生であった。また第1回で呼ばれた芸能人も韓国華僑であったが、ソウル華僑であったことも、場所とイベントの関係を考えるうえで興味深い。

このような乖離は参加者レベルでも同様である。上海通り舞台で行わ

れたのど自慢大会やチャチャン麺早食い大会にも数人ほどの華僑が参加していたにすぎず、地元住民である華僑が積極的に参加することのなかったイベントであった。事情は区民参加型の中央会館舞台でも同様で、招待公演である平壤民俗芸術団や海外から呼ばれた民俗芸能をのぞき、中国語を専攻する韓国大学生による語劇や一般の人々ののど自慢大会などが中心であった。とくに第1回においては、青少年ダンスやテコンドーダンス、区民芸能競演大会「文化ノリハンマダン」などに出演する人々のほとんどが韓国人であった。

出店を通じてイベントに参加する人々をみたとき、第2回では、敷地内で商売を許可されているテントでは華僑が行うところが増えはした。しかし、第1回は大韓民国傷痍軍警会東区会などが行い、釜山華僑は道路脇で肉まんなどを売るにすぎなかった。中国小物を販売するテントはあっても、ソウル華僑が経営していたりもした。

また、イベントの司会者は韓国人で、進行説明も東区文化体育課の職員が行った。エキストラも、第2回で案内を務めるチャイナドレスを着た女性は韓国人アルバイトであった。第1回で、中国の遼(916-1125年)のものを模した衣装をまとったり、映画や漫画などで「中国」を連想しやすいキョンシーやブルースリーの衣装をまとったエキストラも、釜山芸術大学に所属する韓国大学生のアルバイトであった。

このようななか、唯一、地元住民である華僑との接点がみられたのが、中華料理の試食会やチャチャン麺早食い大会、手打ち麺実演および体験で、これらに関しては釜山華僑が中心となっていた。

ちなみに東区文化体育課によれば、上海通り祝祭はとくに「中国系」だけを対象にしたイベントではないが、第1回・第2回を通じて、アメリカ、ロシア、フィリピンといった過去に住んでいた、あるいは今日も住んでいる、華僑以外の住民たちもイベントに参加していなかった。

以上をみたとき、上海通り祝祭は、少なくとも現在の場所とは切り離され

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告
- 場所とイベントの関係性を中心に -

ているといえる。同時に、それは現代中国ともつながりをもたないイベントといえるのである。

5. むすび

以上のように、上海通り祝祭は華僑街を中心としたイベントであっても、共存を試みる住民たち（在日華僑と日本人）の積極的な参加でできた神戸元町の「春節祭」（南京町商店街振興組合）や横浜中華街の「春節祭」（中華青年会）と異なる。また大阪の「四天王寺ワッソ」（関西興銀）なども地元の在日韓国人から提起されており、状況が異なる。「上海通り祝祭」では、イベントが開かれる場所の住民である韓国華僑はあくまでも余所者であり、単なる観客や参加者となった。

それでは、万一このイベントが彼らの主催となっていれば、場所とイベントはつながっていたのだろうか。「清館通り」では、清館がなくなった後も「華僑」と呼ばれる人々が住みついていたとはいえ、代替わりを繰り返し、過去から現在まで連続性をもっているわけではない。現在、そこに住む華僑にも別の場所からきた人々が多くいる。景観や町並みもしかりである。当時より続いてきた建物はなく、1つも「昔」を思わせるものはない。もちろん、またそこには華僑以外の人々も多く住んでいる。一時期は「テキサス通り」と呼ばれて、在韓米軍らが集まるネオン街として名をはせる時期があり、釜山港に立ち寄る多くの船員も常連客となった。また、1990年の韓口国交正常化以降は、多くのロシア人が立ち入り、近年においてはフィリピン系の人々が流入する「外国人通り」であった。このように、実際に通りに名づけられた名称だけみても、清館通りからテキサス通り、そして外国人通りを経て、上海通りと呼ばれるにいたっている。

時間軸の捉え方にもかかわるが、まず清国と中国を直接に結びつけてよいかという問題もある。領土だけをみても両者には差があるためである。

場所との結びつきを考えたとき、それがいかに過去からの連続をもっているのかを問題にするが、このような場所の変化を念頭においたとき、実はすべてのイベントにおいて連続でなかったともいえる。とくにここで事例にあげた上海通り祝祭がそれをみるのによりわかりやすい事例であった。しかし、主催者側をはじめ、そこに積極的に結びつきをみようとする人々が絡むことで、あたかも結びついているようにみえるのである。

ただし、これも「結びつける人」と「結びつきを否定する人」以外の人々にとって実際に連続であるかどうかは関係ないかもしれない。青少年ダンス大会に参加した華僑学校の女子学生に対して、華僑の友人たちが観客席や会場に面したビルの窓から乗りだして声援を送るなど、さまざまに応援してイベントを楽しんでいた。また、会場内の出店でも華僑の主婦層が集まり、声をあげて肉まんなどを販売していた。果たして、彼らは受動的に与えられたなかで楽しみをみついているだけなのだろうか。先の女子生徒も韓国語を駆使し、披露した歌も韓国歌謡である。彼女の世代では友人同士の会話もほとんど韓国語で行う。

場所とイベントが結びつくか否かは単に個々人の結びつけようとする意志による。つまり、結びつくつかないかは参加者の感覚にすぎないのである。

上海通り祝祭は地方行政が仕組んだ企画であり、「われわれ」とは関係がないという華僑もいる一方、積極的にこのイベントを利用する華僑がいるのが現実である。当然、そこには行政からの支援や自らの権威づけも含めてさまざまな思惑が絡んでいる。

場所とイベントの間には、本来的に連続性がないのではないか。それでも連続性を求めて場所と結びつけようとしたイベントが韓国各地で勢いを増して創られている。伝統の創造にもつながる議論にもなり得る。この調査報告ででてきた問題点は、次の機会に発展させて検討していきたい。

釜山「第2回上海通り祝祭」調査報告
－場所とイベントの関係性を中心に－

参考文献：

谷貞志

2004「刹那滅の哲学：瞬間的存在と連続」田山令史・斎藤慶典編『連続をめぐる哲学』
ミネルヴァ書房, pp. 59-97

王維

2001『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』風響社

R. ハンドラー・J. リネキン (岩竹美加子訳)

1996「本物の伝統、偽物の伝統」岩竹美加子編『民俗学の政治性』未来社,
pp. 125-156

林史樹

2005「釜山華僑街“上海通り”に上海はみられるのか? : ‘複製’の成立条件をめぐって」『神田外語大学紀要』vol.17, pp. 99-120

崔海君

2000『釜山史探究』地平